ヒンディー文学史におけるガースレーティー運動について

田　中　敏　雄

ヒンディー文学史におけるガースレーティー運動は20年代のヒンディー文学の一側面を示すものである。従来の文学史や研究書ではこの運動についての研究が脱落していた。69年，公刊されたラトナーカル・パーンデー Ratnākar Pāṇḍey の博士論文[1]でこの運動の一端が明らかになつたが，問題がないとは云えない。

こゝでは，パーンデー論文に触れながら，この運動に関わつた人の書簡や回顧録などの資料で補い，この運動がヒンディー文学史にどのような意義を持つか，二,三の問題を指摘することにする。

この運動は，ウグル Pāṇḍey Becan Śarmā *'Ugr'* (1900-67) の作品を対象として，月刊誌『大インド』*Viśāl Bhārat* の編集長バナーラスィーダース・チャトゥルヴェーディー Banārasidās Caturvedī (1892-) が推進したものである。

ガースレーティーという語は『ヒンディー辞海』*Hindī śabd sāgar* には収録されておらず，『標準ヒンディー語辞典』*Mānak Hindī koś* によれば，ガースレート Ghāsleṭ は「gaslight, 石油，つまらないもの」を意味し，ガースレーティー Ghāsleṭī は「俗悪な，猥褻な」を意味する。『ヒンディー辞海』に収録されていないことは，当時，この語は定着していなかつたことを示している。ガースレーティー運動は，一種の悪書追放運動である，とすることができよう。

特に対象となつた作品は，短編小説集『チョコレート』*Chocolate* (27)，小説『デリーのぼん引き』*Dillī kā dalāl* (27) および『掃除人ブドゥアーの娘』*Budhuā kī beṭī* (28) であつた。教育機関や少年施設で，教師や補導員が少年たちを性欲の対象としていることへの告発の書が『チョコレート』であり，男色の意味でチョコレートが用いられたのはヒンディー語では始めてであつた。『デリーのぼん引き』は売春問題，『掃除人ブドゥアーの娘』は不可触賤民救済問題を扱つたものであるが，いずれもインド社会の恥部を暴きたてたことでヒンディー語

1) Ratnākar Pāṇḍey, *Ugr aur unkā sāhitya*. Vārāṇasī, Nāgarīpracāriṇī Sabhā, 1969. 以下，RP と略す。

世界に衝撃を与え，保守伝統派の怒りを招いた。

パーンデーは『大インド』に掲載された論説，解説，記事，投書等39点，その他の雑誌に掲載されたもの9点をリスト・アップし[2]，この運動に当時の新聞雑誌が直接間接に参加した一大論争のような印象を与えているが[3]，チャトゥルヴェーディーによる『大インド』中心のキャンペーンといつた色彩が強い。チャトゥルヴェーディーは，1）この問題をヒンディー文学会 Hindī sāhitya sammelan の歴代議長に委ね，2）ヒンディー文学会年次大会で反対決議をし，3）カレッジの男女20人の学生たちから感想を求めることを提案し[4]，28年，議長パドマスィンフ・シャルマー Padmasiṃh Śarmā (1876-1932) の下にムザッファルプル Muzaffarpur で開催された年次大会で決議させ，翌29年，議長ガネーシシャンカル・ヴィディヤールティー Gaṇeśśaṅkar Vidyārthī (1890-1931) の下にゴーラクプル Gorakhpur で開催された年次大会で区切りをつけ，12月に「悪書追放運動のエピローグ」[5] を書いて終止符を打つている。

このようにヒンディー文学会等の権威に問題を委ね，多くの執筆者を動員したが，無理強いがあつたようである。パドマスィンフ・シャルマーは28年1月21日付書簡で，「あなたの悪書追放運動は逆効果となつています，……どうして意味もなく敵意をぶちまけているのですか[6]」，とチャトゥルヴェーディーをたしなめている。ヴィディヤールティーも，29年ゴーラクプルの年次大会の際，なんだつてつまらない騒ぎを起したのだ，と詰問し，チャトゥルヴェーディーの弁解を聞くと，君の虚栄心だな[7]，と語つている。月刊総合文芸雑誌『サラスワティー』*Sarasvatī* の編集者デーヴィーダット・シュクラ Devīdatt Śukla (1888-？) のコメントが問題の核心をついているように思われるので引用する。

「カルカッタから『大インド』が刊行された。編集長のバナーラスィーダース・チャトゥルヴェーディーは経験豊かなベテランであつた。いつも大衆の前に

2）RP：258-60.

3）RP：266 で，当時の新聞雑誌20を，支持，同調，中立，無視，反対に色分けしているが，*Sarasvatī* を見落している。

4）RP：261-62.

5）"Ghāsleṭī virodhī āndolan kā upsaṃhār", *Viśāl Bhārat* (Dec., '29), RP：266-67 に引用。

6）Padmasiṃh Śarmā, *Padmasiṃh Śarmā ke patr*. Ed. by Banārasīdās Caturvedī. Dillī, Ātmārām & Sons, 1956. p. 65.

7）Banārasīdās Caturvedī, *Saṃsmaraṇ*. Kāśī, Bhāratīya Gyānpīṭh, 1958. p. 106.

新しい問題を提起していた。『マトワーラー』*Matvālā* の執筆者であるベーチャン・シャルマー・パーンデー・“ウグル”の作品を悪書として攻撃を加えた。“ウグル”はすぐれた詩人，リアリズムの作家で才能もあつた。文学の場からボイコットされるような人物ではなかつた。私にはチャトゥルヴェーディーの攻撃が快くなかつたので，「若い作家たちを支持して」という論説を29年1月号に発表し，“ウグル”を支持した。これに対しあるものに怒り，議論を仕掛けるものもいた。怒つて経営者に訴えたものもいた」[8]「……論説に対して，日刊紙『兵士』*Sainik* は怒り長々とした説教をたれた……たんに徒党を組んでのことなので応じなかつた」。[9]

事実，攻撃は問題を離れて人身攻撃へと移つている。『大インド』に掲載された漫画[10]——ウグルらしき男が『デリーのぼん引き』『チョコレート』『掃除人ブドゥアーの娘』を持つて小舟で上陸しようとしている。半裸の土人たちが踊つて歓迎している。ウグルらしき大道商人が3点の本を持ち歩き，ヒンディー文学大会出席者一同が鼻に手やハンケチをあてている——がこれを物語つている。

チャトゥルヴェーディー自身，無理強いを感じたためであろう，29年11月15日付プレームチャンド *Premcand*（1880-1936）宛書簡で，「悪書追放運動を終りとしたい」，[11]と語つているが，これにはもつと大きな理由があつたようである。

こうして悪書追放運動は成功裡のうちに終止符が打れた，ウグルはボンベイへ逃亡する。

「私に対する非難，金のために猥褻文学を書いている，というのである。今でも確信しているのであるが，金儲けのためならば，小説など書くよりずつとたやすい商売がもつとある。この自負心。私は思つた——くだらない，やめておけヒンディーなんて。がたがた云つている奴にまかせておけ——さあ，ボンベイへ行こう」，[12]とウグルは語り，パーンデーもこれを受けて，「ヒンディー文学界の大立者たちの陰謀と無理解の犠牲となつて，ウグルはヒンディー文学界から離れて

8）Devīdatt Śukla, *Sampādak ke pacīs varṣ*. Prayāg, Kalyāṇ Mandir, 1956. p. 44.

9）同掲書：153.

10）RP：256, 64 に所収。

11）Premcand, *Premcand citṭhī patrī. Khaṇḍ 2*. Ed. by Amṛtrāy. Ilāhābād, Haṃs Prakāśan, 1962. p. 73.

12）*Apnī khabar…lekhak ke ab tak agyāt ārambhik 21 varṣ*. Dillī, Rājkamal Prakāśan, 1960. p. 134.

13）RP：261.

映画界へ入つた」，[13]としている。

約7年間ウグルは沈黙を守り，その後，新しい作品を発表しても無視され，「チョウベーバラモンが私を殺した」，[14]と憤怒をぶちまけていたようである。

悪書追放運動に終止符が打たれてから，22年後，チャトゥルヴェーディーはガーンディー生誕日に際して寄稿し，20数年前のガーンディー書簡を公開した。悪書追放運動を圧倒的に成功させるために，コメントを付けて『チョコレート』を送り意見を求めたところ，返事はチャトゥルヴェーディーの意図に反していたものであつたので，『大インド』に発表せずに，すぐにサーバルマティー Sābarmatī のアーシュラムにガーンディーを訪れ，『チョコレート』には触れずに，40分にわたつて悪書追放の意義を説得した[15]，というのである。28年10月10日付ガーンディー書簡の英訳によると，「私の読後感はあなたのコメントとは同じものではありません。この本の意図は純粋だと思うのです……著者は人道に反する行為に嫌悪を掻き立てたのだと思います」[16]これに対し，『大インド』の元編集者であるモーハンスィンフ・セーンガル Mohansiṃh Seṅgar (1914-　) はチャトゥルヴェーディーの行為を非難して許しがたい罪であるとした[17]。弁明を求めるセーンガルにチャトゥルヴェーディーは「もうこうした論争にまきこまれたくない」，[18]として避けている。

ウグルは『チョコレート』の名誉回復を図るため，新たな序文を付して再刊する。ガーンディーの御墨付のためか，かつて悪書追放運動を支持した評論家たちは沈黙を守つたようである。再刊『チョコレート』(53) は話題にされず黙殺された。再刊『デリーのぼん引き』(65)『掃除人ブドゥアーの娘』(55, 65) も無視された。

この運動はいくつかの問題を示唆している。

「虚栄心」からかどうか分らないが，なぜチャトゥルヴェーディーはこの運動を推進したのだろうか？　パーンデーは「嫉妬心」からだとウグルを弁護する。

---

14) Sūryanārāyaṇ Vyās, "Zindā dil aur sūjh ke dhanī", *Prerak sādhak*. Dillī, Sastā Sāhitya Maṇḍal, 1970. p. 57. 以下，PS と略す。

15) "Bāpū ke rūp meṁ, Ghāsleṭī kā sarg", *Hindustān* (2. 10. '51), PS: 515-16 に引用。

16) *The collected works of Mahatma Gandhi. Vol. 37* (*July-October 1928*). Delhi, MIB, Publications Divisions, 1970. p. 347.

17) "Ek sāhityik anarth", *Nayā Samāj* (July '52), PS: 516-17 に引用。

18) PS: 517-19.

おそらく，チャトゥルヴェーディーのような人々は，文学の徒は学芸の女神サラスワティーに仕えるものであり，ひたすら精進しなければならず，作品を寺院に捧げなければならない，としていたのだろう。また，ヒンディー語を国語にしようとする使命感がこうした文学観を強化していたに違いない。だから，ウグルのような若い作家が書きまくる「作品」が「商品」となる現実に耐えられなかつたのであろう。「その時代の読者に受け入れられたが批評家たちの怒りを招いた」,[19] というのは，ヒンディー文学史上，この時期に，作者，読者，批評家が分化しだしたことを意味するものであると思われる。この分化を促したのは，100万以上のヒンディー語人口を擁し，識字率80%に基づたカルカッタの商業ジャーナリズムであつた。

次に，双方が最終的な判断の拠所をガーンディーに求めていることも重要である。また新聞雑誌の編集者の人間関係も注意されてよい問題である。ヒンディー文学史上の論争の型がこの悪書追放運動に集約されているように思われる。

19) Gopāl Rāy, *Hindī upanyās koś. Khaṇḍ 2 (1918-1936)*. Paṭnā, Granth Niketan, 1969. p. 38.